

有田静昭 著

『子規歌論の発展と継承』

吉江 久彌

本書は子規から始まって現代の土屋文明に至るアララギの短歌史を、子規・左千夫・節・茂吉・赤彦・文明の順に、これら歌人たちの歌論を検討しつつ纏めたものである。著者の有田氏はアララギ派の歌人として五十年に近い歌歴を持ち、現在は短歌雜誌『林泉』（鈴江幸太郎氏主宰）の指導的立場にあり、かたわら京都新聞短歌欄の選者として活躍中の由である。「後記」によると昭和五十年一月から五十四年七月までの間、月々『林泉』誌上に発表した分を一先ず纏められたのが本書で、その後現在に至るまでなお「子規歌論の継承と発展」の稿は書きつがれているのである。執筆の動機は主として『林泉』会員に対する指導と啓蒙にあったと思われるが、著者の真摯な努力によって成った本書は、一般の読者、研究者に対しても多大の便益を与えてくれる。殊におびただしい原典資料からの抄出は、著者のアララギ派歌人としての長い研鑽を裏付けとしてなされているだけに、誠に貴重なものと言わざるを得ない。

もちろん、アララギの歴史は近代短歌史の中で必ず扱われている。すなわち、小泉菱三『近代短歌史 明治篇』（昭和三十年、白揚社）、窪田空穂・土岐善麿・土屋文明編『近代短歌史』（昭和三十三年、春秋社）、渡辺順三『定本 近代短歌史』（昭和三十八年、

春秋社）、木俣修『近代短歌の史的展開』（昭和四十年、明治書院）等がその代表的なもので、当然のことながらこれらの凡てはアララギの記述に絶大の比重を置いているのだし、子規を始めとする各歌人については、それぞれに多くの研究書が既にそなわっている。アララギの系譜についても、たとえば「正岡子規によって唱えられた写生は左千夫・節からさらに赤彦・茂吉などによって継承されている。しかしそれは、子規の主張した写生の概念がかなり変えられてきているのである。それはある意味では発展であり、深化でもあったが……」（渡辺順三『近代短歌史』上巻二七四頁）という発言にも見られる様に、明確な把握が既になされていて、この種の問題にはもはや付け加うべき何ものもないかの様に見える。しかし、著者はアララギ派の歌人として内側からこれを見える。しかも、著者はアララギ派の歌人として内側からこれを見える。しかも、著者はアララギ派の歌人として内側からこれをあらためて自分の問題として捉え直し、わが目を通して綿密な資料の点検を行なうことによって納得のゆく結論を得ようとしたのである。従って本書の大きなメリットは資料の再検討にあると考えられ、その態度は各項の冒頭が殆ど例外なく「正岡子規は」「左千夫は」などと、各歌人たちの言説の引用から始まっていることにも表われている。そして各項が資料の提示と吟味とを通して読者に問題の所在を感得させるばかりでなく、折々は「秦氏の文章は、まことに重要な問題点を提出している。今後は、子規の写生を論ずる場合絵画との関係をより精緻に考究すべきであろう」（一九九頁）、「子規の歌風と歌論を正しく継承したのは、伊藤左千夫であり、それをさらに発展させたのは、左千夫の弟子、土屋文明であると考えるのではなからうか」（一八九頁）等という適切な示唆と問題提起とを行なっているのも、この態度の当然の帰結と考えるとよいのではなからうか。その様な意味において

本書は独自の価値を有する労作であると私は思う。
ここで本書の目次を掲げておこう。

第一章 正岡子規の歌論

- 1 「歌よみに与ふる書」
- 2 感情と理窟
- 3 緊密化
- 4 写生と俳句
- 5 歌併同一説
- 6 写生・写実
- 7 子規の書簡
- 8 写生と絵画
- 9 写生文
- 10 題詠
- 11 子規と万葉集
- 12 主観と客観
- 13 子規の革新

第二章 伊藤左千夫の歌論

- 1 歌の調子
- 2 連作論
- 3 再び連作論
- 4 「新仏教」と左千夫
- 5 「求道」と左千夫
- 6 左千夫と万葉集
- 7 言語のひびき
- 8 言語の声化
- 9 叫びの説
- 10 表現と提供
- 11 左千夫の撰取
- 12 歌と人生

第三章 長塚節の歌論

- 1 初期の歌風
- 2 左千夫との論争
- 3 冴えの歌境
- 4 節と万葉集

第四章 斎藤茂吉の歌論

- 1 仏教的感覚
- 2 「叫びの説」と茂吉
- 3 写生論の展開
- 4 短歌声調論
- 5 茂吉と万葉集

第五章 島木赤彦の歌論

- 1 情趣論と伝神
- 2 「歌道小見」
- 3 赤彦と万葉集
- 4 鍛錬道

第六章 土屋文明の歌論

- 1 文明と万葉集
- 2 短歌に於ける写実
- 3 「短歌小径」

土屋文明覚書

- 1 歌集「ふゆくさ」
 - 2 歌集「往還集」
 - 3 歌集「山谷集」
- 索引(人名・作品名)

書名の「子規歌論の発展と継承」は、内題では『林泉』連載時と同じく「子規歌論の継承と発展」となっており、内容からいってもこちらの方が正当であろう。書名や扉の表記は何かの間違ひとしか思われず、遺憾であるが、これは問わないことにする。とにかく内容は右の第一章から第六章までを主要部とし、「土屋文明覚書」は付説として見るべきであろう。主要部分は子規以下を一人々々検討しては次へ移るといふ方法をとっている。そして六名の歌人のうち最初の子規・左千夫については、後の節・茂吉・赤彦・文明の部分を含み草創期の性格から来る必然でもあったろうし、又、そこに寄せる著者のより大きな関心を示すものとも考えられる。就中体系的な歌論を残さずして早逝した天才子規の信条と実践の意義を把握することに著者は大きな努力を傾けている様に思われるのである。

さて、本書の主題である「歌論の継承」について言えば、写生論と万葉集尊重の精神とが二つの大きな柱をなし、連作論・声調論がこれに付随している。写生論の継承についての著者の見解は、「かくて、子規晩年の歌は、左千夫の連作にも、節の純客観写生説の訂正にも、赤彦の寂寥相にも、茂吉の写生説にも深くつながってゆくのである」(五二頁)、「子規の歌論は、斎藤茂吉の「実相観入」説に、島木赤彦の観照主義的写生論に、土屋文明の即物的なりアリズムに拡大発展してゆく無尽蔵な原質を秘めていたの

である(五五頁)。「子規は」洋画の技法に示唆されて、短歌制作に写生説を適用しようとしたが、「写生論」として統一組織するに到らずして、その短い生を終る。その子規の主張を継承して、左千夫はさらに発展させるのである。『實際を有りのまま』に、客観的に再現させるといふのである(七八頁)。「左千夫の言語の声化説はやがて茂吉の声調説に発展してゆくのである」(一一〇一頁。一五二頁にも同趣の文あり)。「節が」俳句よりさらに印象明瞭に表現する純客観写生説を唱えるに到るのも、子規が俳句より悟入して、和歌革新に向つた、その道程を辿れば、影響の程も背けよう。一方、節の純客観写生説を厳しく論難した左千夫は、子規晩年の主情的な歌風や、短歌が主観を自在に詠みこなし得るといふ考え方を継承した(二二六頁)。「赤彦が、『事象の微動に触入せん』『深く澄み入らん事を冀』つた事は、茂吉の『真相に観入して自然・自己一元の生を写す』といふ写生の定義に発展する」(一六二頁)。「赤彦の歌論は概ね子規・左千夫の歌論を演繹したものである。彼の写生論の如きも、正岡子規に始まり、長塚節によって継承されたと思われる写生論を発展させたものであり、『歌の調子』も伊藤左千夫の声調の進展に他ならないのである」(一七五頁)等、方々に繰返し述べられる言葉に依つて窺うことが出来る。引用が長くなつたが、ついでに万葉観の継承についての発言を見ると、「左千夫は」子規の万葉観を發展させて、主調子的なもの、形式趣味と写実趣味の融合を図るに到るのである(九四頁)。「子規歌論を継承發展させた師左千夫の『言語の声化論』を受け詳述したのが、茂吉の人麿論であり、万葉論である」(一五八頁)、「結局万葉集の歌は写生が実行されているから傑れている、というのが赤彦の見解である」(一六八頁)、「子規、

左千夫の歌論を継承した文明の万葉論は、あくまで実作上の手法の暗示を求むべく深められてゆくのである」(一八四頁)等の言葉がある。これらの見解は概ね妥当であり、穩健でもあつて、殊更に異を樹てようとするところが微塵もないのは、著者の謙虚な人柄をそのまま反映している様であるが、言々句々資料の味読から得られた信念とアララギに対する信頼とに裏付けられて生きている。その点は本書の大きな魅力と云うべきであろう。(引用文中の「、」は本書のまま)

以上、本書の紹介を兼ねてそのメリットと思われる点を述べて来たのであるが、その他に多少望蜀の感がないでもない。次にその数点を述べさせて貰うことにする。

先ず、近代歌壇の状況とアララギのそれへの関与という大きな展望が、図式的でもよいから冒頭にほしかつた。その為には序章を新しく設けねばならなかつたわけであるが、これを置くことで本書の内容が更に生きたものではなかつたかと思われ。当面の主題に直接の關係はなかつたと言われるかも知れないが、本書の論述の中で、茂吉や赤彦に大きく影響を与えた西歌やアララギ以外の歌壇のことに言及されていないのも氣になつた。左千夫の歌論を發展的に継承する上で此のことは無視すべからざるものがあつたと考えるからである。細かい事になるが、茂吉の「木のもとに梅はめば酸し」の歌をめぐる論争において著者は左千夫の主張を是とし、「他は印象批評の傾向が著しいのである」(九七頁)と述べているが、そう言い切つていいものであるかどうか。又、左千夫が「雑報を書いている様な歌」と評したという当時のアララギの若い世代の人たちの歌が果して雑報的であつたかどうか、こういう点をも客観的態度で明らかにしておく方がよかつた、と私は思う。

次に第一章、第二章の記述についてであるが、第三章以下がかなり整理されているに對して随想的な色彩が濃い。これは執筆事情にも関わるので今更どうするわけにも行かなかったのだろうが、せめて項目の表現や配列に一工夫あつてもよかつたのではないかと思われる。氣付いた一、二を挙げると、第一章の冒頭の項は章全体の出発点であるから、「紙教の關係上簡記」などせず「歌よみに与ふる書」をもっと丁寧に紹介し分析してほしかつたし、「子規の書翰」の項は然るべき歌論の項に吸収させる方がよかつたであらう。第二章では「後記」に「仏教思想の影響を論じた事は、些か特色を出し得たかと思うのである」と自負されているように特に仏教關係の二つの項に力点が置かれ、頁数も多いのであるが、調査と記述の綿密さが章全体の中でややアンバランスである印象を拭えない。むしろ仏教への関心が左千夫の歌論にどの様に関わつて行つたかという点を、他の項と同様の叙述法で書かれた方がよかつた様に思う。又、第一章第二章ともに各歌人の歌論をめぐつて書かれていたことは間違いないが、それがそれぞれの變化發展の様相を逐っているのか、それとも主要歌論を柱にまとめているのか、その辺が明らかでない様に思われた。もっとも語り来り語り去る如き叙述が本書の一特色であることは承知の上である。なお子規については「趣味」「趣向」が更に追究されるべき問題であらうし、彼が「單純に人生を傍觀した事にはならない」(一三三頁)事は更に詳論されていい点ではなからうかと思つた。

第三章以下では茂吉・文明についての記述が少なすぎる。特に茂吉では先にも触れた西洋との接觸のこと、有名な「実相觀入説」についても少し詳しく述べてほしかつた。彼の「生命主義」ということもようやく次の章になつて出てくるのである。又、彼の「仏教的感觉」といふことが言われているが、これは彼の歌論とどう関わつていたのであらうか。文明については「短歌小径」を取り上げて何故それ以前の『短歌概論』(昭和七年)がここで無視されているのであらうか。この文章にこそ更に多方面に亘つて彼の短歌理論を論ずべき問題点が潜んでいる筈である。又、「文明と万葉集」では論述が舌足らずで、彼の万葉観がもつ明白になつていない。この点「作品をその背後の時代と生活とともに把握する歴史的事証的態度」が彼の万葉研究に貫かれていふという近藤芳美の指摘(明治書院『現代日本文学大事典』七一八頁)等が顧慮せらるべきではなかつたらうか。

付載の「土屋文明覚書」は第六章を補強する為のものと考えられるが、著者はここでこれまでの解説調を改め、文明の初期の三歌集に窺われる顯著な新しい軌跡の再検討に意欲を燃やしている。然し、抒情の性格を大幅に広げ子規以来の歌論を見事に完成したと考えられる文明の、その全体性についての論及がこゝでも十分なされていふことに、私は不満を感じざるを得ない。自明の事と言ふお積りであらうが、やはり同様に実証さるべき問題である。著者の今後に期待したいと思ふ。

細かく述べようにも紙幅がないので以上にとどめるが、最後に誤植が殆ど無かつたこと、それに引きかえ、文意のよく通じない所(一三五頁、一六二―一六三頁、一七七頁)、接続詞の適切を欠くと思われる所(二〇頁「したがって」、二七頁「そして」)等数ヶ所があつたことを付記する。見当違いの批評も多かつたと思ふが、何卒御海容頂きたい。

(A五版・二三〇頁・昭和五十五年四月・桜楓社・二五〇〇円)

(仏教大学教授)